

大学病院の緩和ケアを考える会

ニュース・レター Vol. 22 No. 2

平成 29 年 12 月 1 日発行

大学病院の緩和ケアを考える会 事務局

〒142-8555 東京都品川区旗の台 1-5-8 昭和大学医学部 医学教育推進室

E-mail: jimukyoku@da-kanwa.org http://www.da-kanwa.org

編集責任者 高宮有介

-
- ご挨拶
 - 第 23 回総会・研究会開催を終えて
 - 準世話人リレー連載：
大学病院の緩和ケアを考える
 - 日本死の臨床研究会 参加報告
 - 第 4 回 医学生の緩和ケア教育のための
授業実践大会に参加して
 - クールダウンエッセイ
-



ご挨拶

代表世話人 高宮 有介（昭和大学医学部医学教育推進室）

第 23 回総会・研究会は、防衛医科大学校主催となり、「リアルキャンサーボード—全人的視点で考えるがん治療と緩和ケア—」をテーマとして開催しました。まさに診断時、治療時からの緩和ケアをライブ感覚で熱く議論して頂き、先進的な取り組みとなりました。会の開催のためにご尽力頂いた藤本世話人、相澤世話人はじめ、防衛医科大学校の皆様に御礼申し上げます。

当会の世話人が中心となって、私の還暦祝いを催してくれました。私の誕生日の翌日の 9 月 18 日に、品川プリンスホテルの宴会場で、100 名ほどの同僚、後輩、懐かしい人々が参集しました。常々、生前葬をしたいと思っていました。緩和ケアの医師として働く中で、多くの若い患者を看取ってきました。特に人生の転機となった患者との出会いがありました。私が 35 歳の時、同じ生年月日の末期がんの男性でした。息子、

娘も同じ年でした。他人事には思いませんでした。そんな彼も死を迎え、全ての人に死が来ること、それはいつ訪れるかはわからないことを思い知りました。その後、来年は生きているか分からないと心に刻みながら、60 歳を迎えました。自分の大切な人が集まってくれるのなら、この機会に心からの感謝を述べたいと思いました。私が死ねば、この人達は葬儀に集まってくれるかもしれない、その時には、どこかで私も見ていると信じていますが、直接お礼は言えません。そんな場だと思いました。会の名称は、「夢をかなえる」でした。会の最後の挨拶で、幹事から私の夢を大いに語って欲しいと言われました。もちろん、医学教育やセルフケア教育など、挑戦したい夢はあります。しかし、集まった後輩達を見て、私の夢は、このような後輩達が「夢をかなえる」きっかけを作り、サポートすることではないかと思いました。私自身、ある予備校の教師との出会いで、文系受験失敗から医学部を受験しようと思に至りました。誰かのために生きたい、それが医師という道でした。私も出会った誰かのご縁を導く存在になれば幸いです。





第23回総会・研究会を終えて

防衛医科大学校病院 緩和ケア室 藤本肇

去る平成29年9月16日、防衛医科大学校臨床大講堂において、「リアルキャンサーボード～全人的視点で考えるがん治療と緩和ケア～」をテーマに、第23回大学病院の緩和ケアを考える会総会研究会を当院看護部の緩和ケア認定看護師相澤佳代子と共に主催させていただきました。台風が接近するなか、参加者176名、スタッフを含め約200人が会場を埋めた一日となりました。主催校決定の段階で、代表世話人の高宮先生から主催校における緩和ケアの啓発に役立てるという目的を示して頂きました。当番世話人として相澤看護師と構想を練った結果、がん治療医にも参加してもらい、リアルキャンサーボードを開催する中で、緩和ケアの視点を治療医に伝えるというアイデアが浮かびました。しかし、構想は浮かんだものの、本院ではキャンサーボードと呼べるような横断的な検討会は、未だ本格的には開催されておらず、体裁を整えるところからの準備となりました。1年間をかけて、世話人の先生方のご指導、ご意見を頂きながら、講演の講師陣を院外主体にお願いし、使用する事例は、講師の先生方とも綿密に打ち合わせを重ねて練り上げました。

当日、まずは、キャンサーボードのあるべき姿について学ぶべく、海外でのご経験もある聖隷三方原病院の森雅紀先生にランチョンセミナーでご講演を頂き

ました。キャンサーボードがもたらす効果についての文献的考察や、欧米での多職種による開催の状況をご紹介いただきました。次いで事例検討では、直腸がんの骨盤内、骨転移再発に対する集学的アプローチについて、放射線科・麻酔科・整形外科・緩和ケアの各分野を代表する医師によるミニレクチャーを、療養選択について、退院支援に関わる看護師・社会福祉士の各職種を代表してワンポイントレッスンを行っていただいた後に、実りあるリアルキャンサーボードが開催され、フロアの参加者からも積極的な発言が聞かれました。皆様のご協力で、ほぼ予定通りの進行でしたが、十分に充てたはずの時間が少し物足りなく感じるほど、考えるべき要素の多い事例で、アンケートでも良かったとのご意見を多く聞かれました。会の締めくくりには、日本医科大学武蔵小杉病院腫瘍内科の勝俣範之先生から、「抗がん剤の中止をどうやって患者さんに伝えればよいか？」のご講演をいただきました。いかに日本の医療現場で死の間際まで抗がん剤が継続投与されているかという現状と、中止の説明の際の言葉の選び方などを示していただきました。参加者の中には治療医も多く、印象深い内容に大きな反響がありました。

最後になりましたが、改めてご講演頂きました先生方、開催準備段階から継続的に盛会へと導いていただいた世話人の先生方に心から感謝申し上げます。

☆準世話人リレー連載 大学病院における緩和ケアを考える

～あそかビハーラ病院から、大学病院の緩和ケアを考える☆

あそかビハーラ病院 大嶋健三郎



現在、私は、京都府城陽市の「あそかビハーラ病院」で院長を務めています。1病棟のみ、全28床の緩和ケア病棟で、完全独立型です。あそかビハーラ病院は、医療者と仏教者が協力して行うホスピス・緩和ケア

を目的に浄土真宗本願寺派が設立しました。本邦で唯一の、仏教による完全独立型緩和ケア病棟です。癌の終末期の患者さん、年間200人程度の入院患者さんを診させて頂いています。特色は常駐僧侶が4名配置さ

れており、質の高いチーム医療を担っています。宗教者、医療者、学生、ボランティアなどを対象に、見学研修は年間、のべ約900人を受け入れています。なかでも、他の病院では困難とされる僧侶の臨床研修を実施しており、量・質ともに、力を入れています。

常勤として働くのは、昭和大学病院、昭和大学横浜市北部病院、を経て、3カ所目になります。大規模である大学病院と、最も小さなユニットの病院（20床からが病院となりますので）と、両極端な経験となっています。恵まれたことに、滋賀医科大学5年生の臨床実習、滋賀医科大学の医学部・看護学部の1年生の早期体験学習、京都大学看護学部の実習、京都大学医

学部付属病院の看護師の研修、など、大学病院の緩和ケアにも関わらせて頂いています。昭和大学勤務時に比べ時間は少ないものの、少ない時間だからこそ濃密な体験をして頂きたいと、力を尽くしています。

実習・研修では、多職種カンファレンスを含め、あそかビハーラ病院の1日を体験して頂きます。体調を少しでも整え、痛みを和らげ、それぞれの患者さんに合わせたケアに心を配り、患者さん・ご家族の苦しみを癒すため出来る限りの援助を行う、そんな緩和ケアの根っこを見て頂きます。院内に緩和ケア病棟の無い大学病院と、この様な連携を図ることにより、

様々な医療者に緩和ケア・緩和ケア病棟を知って頂

死の臨床研究会 in 秋田 参加報告

東邦大学医学部臨床腫瘍学講座 中村陽一

緩和医療に携わる医療者として、年に1回の日本死の臨床研究会に参加し学ぶことを私は大切な時間に行っています。自身の死生観を醸成し、医療者になろうとした初心を思い出す時間です。そして、これから1年、「また頑張ろう」と目標を改めて考える研究会であります。

この研究会は1977年に設立され、本邦の緩和ケア関連の学会・研究会としては最も古くからある研究会です。「死」という言葉が付き、なかなか他の医療者からは理解されないこともあります。この会の目的は「死の臨床において患者や家族に対する真の援助の道を全人的立場から研究していくこと」であります。多くの学会が規模が大きくなり、地方開催が難しくなる中、全国の支部が持ち回りで、年に1回の年次大会を開催しています。

今回の第41回日本死の臨床研究会年次大会は、「ケアする私を育む 見て、感じて、考える」をテーマに秋田県秋田市で2017年10月7日、8日に開催され、全国から多くの参加者を集めました。

主題講演として「ケアする私の成り立ち」として、柏木哲夫先生（淀川キリスト教病院）から、緩和ケアのレジェンドとしてのご自身の歩みを伺いました。先生のご講演は大学病院の緩和ケアを考える会においても、何度も伺う機会を頂戴していますが、死の臨床

第4回医学生の緩和ケア教育のための授業実践大会に参加して

2017年11月18日、東邦大学医学部にて開催された授業実践大会に参加させていただきました。開催時間の7時間が短く感じられるほどの貴重な体験でした。

くこと、これも「大学病院の緩和ケア」の一部であると思います。

また、当院の特徴であるビハーラ僧（浄土真宗本願寺派の僧侶、臨床宗教師の資格者2名を含む4名）が、どのようにケアにあたるか、どのようにチーム医療に加わるか、を間近で見て頂くことも意義を感じています。それと同時に、1人でも多くの僧侶の臨床実習を受け入れています。当院で緩和ケアを学んだ1人でも多くの僧侶を、多くの病院で苦しんでいる患者さんのもとに送り届けられること、それも今、私の目標の一つです。

との出会いや魅力、先生が大切にされているケアの要素を学ぶことができました。

お昼のセミナーでは、萬田緑平先生（緩和ケア萬田診療所）から、「最後まで目一杯生きる」というタイトルで、患者さんに寄り添う、現場の姿をスライドやお話だけでなく、実際の患者さん・ご家族の登場する動画から、死に寄り添う存在である医療者のあるべき姿を学ぶことができました。

本研究会の醍醐味のひとつは、事例検討であります。困難症例を医療者がプレゼンテーションし、討議したい論点を述べ、座長、会場の参加者と多職種でディスカッションする場があります。参加していた医療者が、「この場に来て発表することが自分自身のモチベーションになっている。」と発表のなかで触れていたことが印象的でした。本学の3病院からも、いつの日かこの場で発表することができればと思っています。

秋田の美味しいものを堪能、秋田空港の出発ロビーで日本の日本酒まで楽しみました。



滋賀医科大学医学部臨床教育講座 山木照子

会全体は3部構成で、第1部では「医学卒前教育としての緩和ケア教育内容の変遷とこれからの医療者に求められること」として高宮有介先生がお話くださった後、「これからの医学教育に向けて新しい視

点の創造へ」をテーマにワールドカフェで話し合いました。はじめに高宮先生のお話から、死に向き合う教育が、緩和ケア教育の中でもあらためて考える必要のある難しいテーマであることを再認識し、「死」が緩和ケア教育の内容に取り入れられにくいことについて考えるヒントを頂きました。「緩和ケアの教育は、医師の基本的なコミュニケーション・態度の教育である」とのメッセージから、医学教育の中で死に向き合うことの意味・意義を考えました。ワールドカフェでは、ホスト役の先生含め5~6名が1つのテーブルを囲み、計4つのテーブルで、これからの緩和ケア教育についてアイデアを出しあいました。各テーブルには1~2名の医学生が参加されていて、学習者の意見を踏まえ、学習効果を考えながら話し合うことができました。

第2部では、「死を見つめる」をテーマとして、淀川キリスト教病院理事長の柏木哲夫先生がご講演くださいました。死の医学化についての「死は人間的出来事（Human issue）であり社会的出来事（social issue）であって、医学的出来事（medical issue）ではない」とのお話を伺い、医学生がそれについて学びを得ていける緩和ケア教育をどのように進めるか考える糸口を頂きました。ホスピスの医学化（medicalization of Hospice）に対する危機感があるとのお話から、「生きる」のを支えるのが緩和ケア、

「生ききる」のに寄り添うのがホスピスケア、というお言葉の意味を考えました。医学生へのメッセージとして「緩和ケアは医の本流であるが主流ではない。はじめから本流にいてもよいし、他の流れにいて、本流に戻ってくるのもよい」ことを伝えていただきました。

第3部では、「患者の死に向き合うこと」をテーマとした授業づくりについて、ワールドカフェと同じメンバーで約1時間半話し合いました。グループディスカッションと各グループのご発表を通して、体験による学習とともに、事前の準備と事後の定着・発展も学習効果を高めるために重要との学びを頂きました。

きめ細やかなプログラムに、ご準備のほどがしのばれました。ご教示くださいました先生方、大会開催・進行にご尽力くださいました皆様に深く感謝申し上げます。



○●クールダウンエッセイ○●

横浜市立大学附属市民総合医療センター化学療法・緩和ケア科 齋藤真理

2017年9月18日。敬老の日。3連休最終日。品川プリンスホテル12階で『高宮先生お祝いの集い』が無事、盛大に開催された日。

出席者一同の写真を今一度ご覧いただきたい。全員揃ってこんなにもスマイルできているなんて、高宮有介パワーが存分に満ち溢れたパーティーだった証である。カラー写真ではないのが残念だが、主役はお色直し後パールピンクのジャケットに、フラダンス姫からプレゼントされた真っ赤なレイをかけている。

お祝いを受ける主役の出番のほうが圧倒的に多いユニークなプログラム構成となったが、それも「高宮」色。十八番の「死からいのちを学ぶ」講義、腰をふりふり山本リンダ、金メダルがサプライズで授与された重量挙げパフォーマンス、2次会のお店をあげての博多一本締め。長生きをお祝いする還暦祝いではなく、新しいスタートを祝福している門出に

なった気がする。

発起人たちは職場も職種もばらばらであったが、それぞれ得意分野で汗をかきつつ大活躍。チームワーク抜群であったと自画自賛。語らいと笑顔が満ちていた。お食事もおいしく完食だった。赤字にならなかった。多くの方にご協力いただいた。大感謝。

